

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25590171

研究課題名(和文) 社会的セラピー技法の開拓を通じた新しい心理実践家の育成

研究課題名(英文) Developing Psychological Practitioner Through Social Therapeutic Methodology

研究代表者

茂呂 雄二 (MORO, Yuji)

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：50157939

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究が開発をめざしたソーシャルセラピーとは、語り合いや遊び等のグループワークを行ないながら、コミュニティービルディングを実践するための技法である。この技法を開発するために、数カ所の地域社会における質的調査方法によってニーズを探り、先行する海外のソーシャルセラピー的なコミュニティービルディングやチームの創造性開発に関する実践事例を収集して情報を集め、これらの情報をもとに日本の文化風土に適合する社会的セラピーのひな形を提案した。特に、現在の日本社会における喫緊の課題である、格差の拡大に曝されている貧困層の若者支援のための仕組みづくりを行った。

研究成果の概要(英文)：In this research, we try to develop social therapeutic methodology, that is methods for community building through group work by talking with and playing with others. For exploring this methodology, 1) surveying needs for community building building through qualitative interviewing methods, 2) analyzing community organization cases and team creativity developing instances, and based on these two informations, 3) proposing a mock model of social therapeutics which seems resonating with Japanese cultural and social formational conditions. In particular, we propose a social therapeutic methodology for young poor people in Tokyo, who are exposed severe economical gaps and shortage of social capitals.

研究分野：学習心理学

キーワード：発達 学習 ソーシャルセラピー 格差 若者発達支援

1. 研究開始当初の背景

現在、我が国では個人対象の心理臨床的な支援だけでなく、グループあるいはコミュニティレベルでの心理的支援を担う実践者が必要とされている。例えば、震災後コミュニティの再興のために地域社会の紐帯のあり方を再構築することを通じた復興が求められ、そのような地域社会の再構築や再活性化を担う人材が必要とされている。

また一方で、長引く経済不況の中で企業の創造性の活性化が喫緊の課題となり、チームによる学習と発達とそのファシリテーターが必要とされている。このような課題に対して、近年の学習科学の知見にもとづいて多様で豊かな心理的支援を構想できるのだが、それを現場で担う実践者の教育にはまだまだ手がついていない。そこで、本研究は、社会的文化的アプローチ或は活動理論にもとづいて構想された学習科学の知見を、グループあるいはコミュニティの学習と発達の理解に生かし、それを支援するような実践者の育成課程を開拓する必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、新しい心理実践家育成のために、社会的セラピーと呼ぶコミュニティレベルでの学習と発達の支援技法の開発を目指す。近年地域ならびに職場では、チームとしての学習やコミュニティの発達とその支援が求められている。このとき、いわゆる臨床心理ではなく学習科学の観点から、コミュニティにおける人々の協同のあり方を理解し、それぞれのコミュニティにあった支援実践に関わる人材を育成することは重要な課題となる。

本研究は、学習する職場・コミュニティの心理的支援のニーズを調査によって明らかにし、海外のグループワークによる支援技法を収集整理し、日本の社会文化に適合した社会的セラピー技法を開発し、大学院レベルでの実習を通して習得できるような課程の整備を目指す。

3. 研究の方法

本研究が開発する社会的セラピーとは、語り合いや遊び等のグループワークを行ないながら、コミュニティビルディングを実践するための技法である。この技法を開発するために、以下の作業を進める。数カ所の地域社会や企業内チームにおける質的調査方法(面接による談話データの収集と質的分析)によってニーズを探り、先行する海外の社会的セラピーと類似したコミュニティビルディングやチームの創造性開発に関する実践事例を収集して情報を集め(参与観察及び面接) これらの情報をもとに日本の文化風土に適合する社会的セラピーのひな形を提案する。

本研究で開拓に取り組んだ社会的セラピー

技法は、以下の3つのセラピー実践からなる。

(1)グループでの継続的語り合いによる概念形成セラピー：各チームおよびコミュニティには潜在的な学習課題と発達の可能性がある。これをグループメンバーの語り合いの中で、学習課題を定式化し、名付けを与えるプロセスが概念形成セラピーである。

(2)実践者と研究者と協同してチームやコミュニティを調査し分析するエスノグラフィセラピー：研究者が収集したそれぞれの実践現場の情報(ビデオ資料、文書資料、ナラティブ資料)を検討しながら、学習課題を特定するセッションをエスノグラフィセラピーと呼ぶ。

(3)グループメンバー同士の即興演劇遊びによるワークショップセラピー：通常の実践業務ではおこなわない、遊び(言葉遊び、身体遊び)を通じた、チームやコミュニティのメンバー相互理解をめざした即興遊びをワークショップセラピーと呼ぶ。

これらの3種類のソーシャルセラピーメソッド開拓を目指した。

4. 研究成果

(1)本研究が開拓した、ソーシャルセラピーとは、参加者が発達の学習環境を構築することをとおして、参加者同士の情動的紐帯と参加者同士の相互発達支援を生み出す、コミュニティベースの発達支援モデルである。この発達支援モデルに基づいて、地域住民と大学教員によるソーシャルセラピーカフェの実施と、青少年発達支援団体との勉強会を行い、ソーシャルセラピーの適用可能性を検討した(今後以下の研究成果が発信される。Y. Moro (Ed.) (in press) *Learning as Community Building*. Palgrave. Moro et al. (in press) *Revisiting Wildfire: From the viewpoint of exchange forms. Mind, Culture and Activity.*)

(2)本研究の成果から、学習者自身の環境構築の視点から、状況的学習論をさらに発展させることが可能となった。状況的学習論(あるいは学習への社会的文化的アプローチとも活動理論とも呼ばれる)は、1980年代後半から学習心理学領域で、様々な知見を蓄積し一定の成果を上げてきた。仕事場における学習を記述し介入することで、学習をひろく社会文化状況に位置づけ直し、それによって学校教育における学習のあり方に革新をもたらした。しかし、未解決の多くの課題もあるが、そのうち、本研究は、1)学習組織における情動の役割、2)学習環境の創造における学習者自身の役割、3)実践への介入メソッド開発における遊びの役割の3点の課題に着目して、状況論を拡張する方向性を見いだすことができた。

ソーシャルセラピーは、上記の3点の拡張に関して多に役に立つことが確認できた。

1)については、従来の状況論が認知・知識面が中心であり、情動面を織り込んだ理論展開が求められていることに加えて、OECD調査等では、生きる力に対応する社会情動的学習の重要性が指摘され、米国等では政策立案にもからむ大きなイシューとなっている(OECD, 2015, *Skills for Social Progress*. OECD Skills Studies. OECD Publishing.)。学習と情動の関係について理論の確立が求められており、情動面での拡張は時宜にかなう課題である。

2)については、従来の状況論、とくに認知的徒弟制の議論では、既存コミュニティへの参加が前提にされ、学習者自身の実践を通してコミュニティと環境を構築する実践は等閑視されてきた。この点についてコミュニティビルディングの可能性を確認した。

3)に関しては、コミュニティに既存のスキル・知識への学習者のアクセスが記述研究されても、実践者自身がどのようにしてコミュニティ作りを進めるのか、実践者に利用可能なコミュニティ作りのメソッドの問題は充分注意が払われてこなかった。本研究では、企業における創造性開発に利用される即興・演劇遊び (Salit, C.(2016, in press) *Performing Breakthrough*. Hachette.) を参考に実践者の利用できる簡便なメソッドとして開発し提供する。

(3)本研究の特色ある、具体的成果として、東京都内の子ども・若者発達支援団体と連携して、発達支援団体のひな形を作り、そこにソーシャルセラピーを適用していることをあげることができる。

このひな形を作った地域は、一人親率、就学支援金受給率、生活保護世帯率が高い地域であるが、この地域での1)パフォーマンス遊び、インプロ遊び等を定期的に行う放課後支援イベントを開催して、ソーシャルセラピーメソッドの持続的な適用可能性を確認する場をつくり上げた。

2)また、この地域の子供達に乏しい、社会関係資本を再分配できるような、おとなと子ども達の出会いの場を用意して、継続的なソーシャルセラピー支援を可能にした。

3)また茨城県の農家の方々の支援を得て、一緒に料理を作るイベントを開催して、格差に曝されている子ども達と、彼等の身近にはいない大人達との、出会いと共同活動を可能にする仕組みづくりをした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

新原将義・茂呂雄二「音楽家はアウトリ

ーチ実践をいかに語るか 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた検討」,『筑波大学心理学研究』, 49, 9-19, 2015. (査読有)

太田礼穂・茂呂雄二「自己への誤帰属はどのようなやりとりの後に生起するのか? 発話の特徴ならびに発話連鎖の検討」,『教育心理学研究』, 63, 63-76, 2015. (査読有)

上野直樹・ソーヤーリエこ・茂呂雄二「社会-技術的アレンジメントの再構築としての人工物のデザイン」,『認知科学』, 21, 173-186, 2014. (査読有)

守下奈美子・茂呂雄二「船員教育における実習指導者のはたらきかけの検討」,『認知科学』, 21, 438-450, 2014. (査読有)

新原将義・茂呂雄二「合奏練習場面における指導者の働きかけをいかに捉えるか 社会・文化的アプローチの観点から」,『認知科学』, 21, 468-484, 2014. (査読有)

[学会発表](計 1 件)

Kagawa, S. “Multilayered contradictions in the Japanese anti-nuclear movement: Performance, boundaries, and history”, *ISCAR 2014 Australia (Sydney)*, Abstracts of interactive poster presentations, 19 September 17 2014.

[図書](計 3 件)

香川秀太「「創造的評価」の重要性 非公式な学生コミュニティがインターンシップを変える」,『学校インターンシップの科学 大学の学びと現場の実践をつなぐ教育』ナカニシヤ, 2015, 320 ページ、(pp.143-170)。

香川秀太「「越境的な対話と学び」とは何か プロセス, 実践方法, 理論」,『越境する対話と学び 異質な人・組織・コミュニティをつなぐ』,新曜社, 2015, 400 ページ (pp.35-64)。

香川秀太「コミュニティを横断する学習」,『新教職教育講座 第7巻 発達と学習』, 協同出版, 2013, 235 ページ (pp.145-164)。

6. 研究組織

(1)研究代表者

茂呂雄二 (MORO, Yuji)

筑波大学・人間系・教授
研究者番号：50157939

(2)研究分担者

香川秀太 (KAGAWA, Shuta)
青山学院大学・社会情報学部・准教授
研究者番号：90550567